

第 1 回 山田池 鴨を楽しむ探鳥会 2023 年 1 月 14 日 (土)

13:30 山田池公園北駐車場 集合

・昭和 14 年当時、約 10 万羽ともいわれるトモエガモの飛来が記録されたという山田池。当時、大阪支部では山田村村営の鴨場見学会を兼ねた新年宴会を開催し、山田池のカモを見て帰途、付近の料亭「魚富」で鴨料理の宴会をしていたということです。

当時の行事予告(「野鳥」昭和 13 年 1 月号)には、阪神支部主催山田池鴨猟を兼ねた新年宴会として正月 9 日の開催についての案内が掲載されています。「説明 鴨並に山田池付近の野鳥実地指導は榎本指導員が当たります。但し鴨は人の姿や声に敏感ですから、鴨池での談笑は御遠慮のこと。懇話会 鴨スキ、鴨雑炊等、料亭なら一日十円を要しますが、今回は農家の奥座敷利用野趣を旨とします。受付人員 五十名厳守」とあります。



大阪府北河内郡山田池鴨場 中西悟堂撮影
昭和 14 年当時の山田池
「野鳥」1939 年 2 月号「鴨場グラフ」から複写引用

行事予告 「野鳥」昭和 14 年 1 月号

懇話会——山田村料亭魚富にて。鴨の織板鏡(昨年は非常に

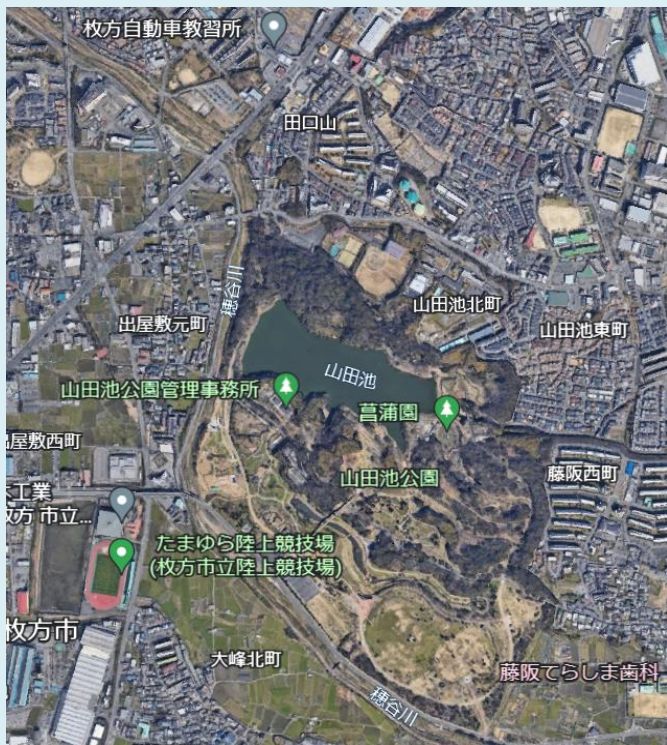
ひます。
説明——鴨並に野鳥の實地指導は、榎本先生がして下さいます。鴨は非常に敏感ですから鴨池での聲高の御談笑は御遠慮願ひます。
懇話会——山田村料亭魚富にて。鴨の織板鏡(昨年は非常に

豫 阪神支部主催
山田池鴨場見学会
を兼ねた新年宴会



1947 (昭 22)年 土地院 地図・空中写真閲覧サービスから

好評)、すき焼、鴨飯、等を差上げます。何分土地の料理屋ですので割合に安くなります。
道路——会場から枚方東口迄徒歩—野鳥観察(但し御都合に依りハイヤーならば一圓五十銭、枚方東口にて解散。
會費——大人參圓五十銭(御酒共)、小人二圓五十銭(鴨場への心附。料理代及祝儀を含む。當日堀田幹事に御渡し下さい。但し往復電車賃、バス賃(共九十銭)は各自御辨。省線末木驛より山田池迄のハイヤー賃は約二圓五十銭位。
受附人員——五十名厳守。一月六日迄の御申込に限る。
注意
A 双眼鏡又は小型望遠鏡は成可く御携帯。
B 生鴨値段(竹カゴ入一番ひ)は去年は左の様なものでした。小鴨(一圓六十銭)マカモ(五圓)但し本年は幾分値上り。鴨(三圓六十銭)マカモ(五圓)但し本年は幾分値上り。
なほ當日見聞し得られる鳥は大體左の通りです。
ハシブトガラス、ハシボソガラス、ムクドリ、コカハラヒワ、雀、アraj、ノジコ、ホホジロ、ヒバリ、タヒバリ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、キセキレイ、目白、モズ、ヒヨドリ、ウグヒス、鴨、ジャウビタキ、ミソサザイ、カハセミ、トビ、青鷺、コサギ、ゴキサギ、カイツブリ、マカモ、カルガモ、コガモ、バガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、ラナガカモ、ハシビロガモ、キジバト、クサシギ、イカルチドリ等。



現在の状況 Google Earth から

書 信 函

巴鴨の大群 最近山田池(巴鴨の大群(約十萬羽と云ふ)が来り、その羽音もすごく、又飛立つとも何とも言へなかつたさうですが、三日程で、どこかへ行つたさうです。河内の各御陵の池にはどこにも大分来てる様です。又播州の海岸には海鴨が随分いる様です。いづれ舟で見て行つて海鴨の群飛を描きたいと思つてゐます。(二月十一日大阪・堀田光雄)

「野鳥」昭和 14 年 3 月号
堀田光雄幹事の報告文
山田池へトモエガモの
大群約 10 万羽が飛来し、
3 日程で飛び去ったことが
書かれている。

遂に榎本佳樹先生がホームシックを起された話。前夜
森田博士邸で一泊された中西榎本兩先生のお供して明朗
堀田氏と山田正枝、計五人、今日は全くの行業で山田村
の鴨池へ。

ぬるでもみちが日に映える片山道は鴨の聲、溝をばの
花、挽え伏した黄金の晚稻、藁家の脊戸に赤い鈴なりの
遊柿。シャッターを切る刹那にツツと飛んだ鴉を見送つ
てゐられた肩幅の廣い中西先生のおだやかな笑顔がこち

らに向けた拍子に秋日に輝くそこらが一ときに微笑したやうな気がした。鶯のチャ
ッチャッと鳴く飯盛の陰にひつそりと光つてゐる池の汀でカイツリを眺め入つた
り、指摘される水なし池の田ひばりを漸くの事で見つけたりの道草喰ひつツツ連り着
いた番小屋では七八歳の男の兒、都人の光采とばかりに膝法師チョキンと揃えて坐
つてゐたのは忘れられない可愛らしさだつた。

中西先生佳詠中に入るの光榮に浴したコールテンのスボン穿いた爺さんに案内さ
れていよいよ山田池へ——この小徑で朝食してゐない正枝クンがちひさい熟柿二つ
そつと貰つた事は内密——展開された山田池、雷に静寂の別世界である。高い白
雲を映し、岸の黄葉づる木々を映した池の面に點々と浮く眞鴨が右り左に行交ふ毎
に三角型の水脈はのびのびとひろがつて柔らかに消えてゆく。そのとらへどころの

ない水の委がちつと見つめてゐる人間の心を限りなき閑に誘引して、絶えず鳴き合
ふ鴨の聲も空中に反撥する鴨の聲も却つて静寂を助成する代りとなつてゐる。

美しく光る青い頭、水の上すべる翼のおと、ちらちら躍る白いしぶき、うしろ
の森でキジバトが啼いた。汀つゞきの前の窪地に考へてゐるやうな形のひくい葉な
し柿の木に二個ッきりの大きな實があかかと精一杯日に照つてゐる。その根元で
思ひ出しては鳴くえんまこほろぎの聲音が澄切つた空気を淺くふるはせてゐる。――
「明るい静寂」。

池の一方の僅かに開いた黄葉の樹間からなだらかな山城の連山が藍霞んですこし
見えるのも妙になつかしい。

中西先生は重さうに見えて割合軽いリュックサックを下して草の上にドックリ坐
り、池の寫生に取掛られた。榎本先生はスックと立ておもむろに耳目を澄してゐ
らつしやる。接する人を悉く明朗化する堀田幹事はコールテンの爺さんと立話、私は
正枝クンと相並び穂芒のかけから飽かず池を眺めた。『エホバは……われをいこひ
のみぎはに伴ひ給ふ』心の中で吟じつつ兼に脚をのびしてのうのうと秋色に浸り切
つた安らかさ、何も彼も忘れてけに恵まれた今日ではある。

頭上を拵高い聲でひよどりが横切つた。
『一體何と思つてあんなにゆつくりかんとしてゐるのでせうねえ』と愚問を發する
程向ふ岸の木に青鷺が五六羽身じろぎもせず止つてゐる。その木を指して飛んで來

山 田 池

寂^さび^び明^ある^る水^み沼^ぬの^の青^あの^の片^か照^てり^につ^つぶ^ぶつ^つ
浮^うび^び鴨^かは^は潜^ひか^かず
秋^あの^の日^ひの^の照^てし^しづ^づか^かなり^り鳴^なが^がひ^ひく^く水^み脈^まの^の
幾^いす^すち^ち消^けえ^えて^ては^はう^うま^まれ^れつ^つ
對^{たい}岸^あの^の枯^か木^ぼに^にひ^ひと^とつ^つ青^あ鷺^さの^のち^ちて^てう^う
ご^ごか^かず^ず日^ひは^は照^てり^にけ^けり
ひ^ひろ^ろげ^げた^たる^る翼^{よく}傾^かけ^けて^てお^おほ^ほら^らか^かなり^りふ^ふり
さ^さけ^け見^みれ^れば^ば舞^まへ^へる^る青^あ鷺^さ
日^ひの^のあり^り處^{ところ}雲^{くも}に^にか^かく^くれ^れて^て遠^{とほ}空^{そら}ゆ^ゆと^とん^んび
の^のこ^こゑ^えの^の落^おち^ちて^て來^きに^にけ^けり
日^ひの^のあり^り處^{ところ}雲^{くも}に^にか^かく^くれ^れぬ^ぬしま^まら^らく^くの^の沼^{ぬま}
の^の昏^くさを^をよ^よぎ^ぎる^る鴨^か
穂^ほす^すさ^さの^の穂^ほの^の間^まに^に水^みは^は光^あり^りたり^りう^うつ^つ
つ^つを^をな^なけ^けれ^れそ^の沼^{ぬま}の^の水^み
な^なに^にが^がし^しと^と名^なを^をさ^さき^きと^とめ^めて^て鴨^か池^いの^の番^{ばん}小^{せう}
屋^やの^の主^{しゅ}に^に親^おし^しさ^さわ^わき^きぬ

中西 悟 堂

た白鷺の優美な姿態はゆらりと水に反映しながら秋日の中に美しい線を曳きつ
つ直角にさげた脚をあやまたず下枝にしつかりと、静止した。
空の廣さを思はせるやうな鷺の聲が天の一方から傳はつて聲が池に落ちてくる。
『あ、チウヒ』榎本先生の聲に振りさけみる眞上の空で一群の鷺に前後左右を亂
舞されつづ日に光つてかじろく見える双翼をおうやうに帆翔したり、羽搏いたり、
くるりくるりと續つたり、鷺の翼と相觸れて交歓する様は羽族に至純なる至愛を傾
倒しつくす隨一人者を歓迎してゐるやうにも、私には見えた。
チウヒの待つてゐた山田池。
紅葉もと高く抽立つ向ふ岸の清浄な小山は日の照り響りする池の面に和やかな
影を母のふところの如く沈めてそこは特に多く鴨が悠々自適してゐる。いかにも安
らかげだ。
憂世離れの鴨はいいナアと淡望心が起つてこの鴨をスキ焼にする人間を一寸憎ら
しく思つたが山田池の歸途堀田氏の御厚配で牧方の魚當で鐵鑿鑿およばれたこと
は無論、鴨はおいしいと思つた。
ここで京都へ延ばすか歸阪かと、和氣篤々たる意見圖々であつたが二日間家を空
けられた榎本先生のホームシックに依つて一同揃つて大阪へ。
私達女性に對する濃やかなるお心遣ひのそのホームシック。

「野鳥」昭和14年1月号から

筆者の山崎静子さんは、大阪在住の会員で歌人 榎本佳樹との親交が深かった
中西悟堂も一緒に山田池を訪れ短歌を詠んでいる

阪神支部報告

淀川河畔鴨池見學

二月五日、本年は殊の外不獵ときく大阪府下の鴨池見物に赴く。同行は支部長森田理學博士、榎本佳樹翁、守山白雲の三人。天満橋より京阪電車を枚方驛に捨て、更にバスを四ツ辻といふ部落に捨て北河内郡山田村に入る。徒歩約二十分山田池に達す。一村禁獵區なれば雉鳩、雉子の類多く、鷹に襲はれたる鳩の羽毛所所に散亂す。山田村々營の鴨場なり。山田池は大いさ大阪の中の島公園程もあるべく、四圍を密林、藁等にて垣根し、僅に管理人小屋の裏より覗くのみ。雙眼鏡にて觀察すれば、眞鴨、小鴨、嘴廣鴨、尾長鴨、巴鴨、ヒドリ鴨等、貳千羽に近き水禽羽翅相接し、清音、濁音、哀音錯綜して木々に笏す。但し本年は意外の暖氣の爲、例年三月北方へ移動すべき鴨類が、一月上旬にポツ／＼移動し始めたると、或は奥羽地方に滞留せしまゝ南下せざりしものありしとにより、稍々数は少

しと覺ゆ。又この邊には海鴨類は混じ居らず。山田村役場への納金は一ヶ年九百餘圓、収入は一ヶ年約四千圓、生鳥として阪神間に販出さるるも、本年あたりの相場は青首一番五圓三十錢、小鴨一圓五十錢位ときく。

歸路に大池といふ鴨池あり、池畔の枯木に小鷺子むも面白し。「うき沈み木の葉流ると見えつるはにぶの川瀬にかつぐ鳩鳥」のかいつぶりが、二番三番浮游する様も愛らしく、一行童心に還りて持參のむすび頬張るも愉し。

枚方の町よりハイヤーにて、大葎切、雪加の營集地方淀河畔を過ぎ、三島郡茨木驛(省線)の西南方二軒の松林中にある八丁池に往く。この池小鴨多く、鳥は人に馴れ、行人を近づかしむる事驚く許り。驛に近く、雙眼鏡なしで觀察出來、附近に松澤池、釋迦池、茨木ゴルフリンクス等の行樂地もあり、鴨場見學地としては好適地なるべし。

歸途某旗亭にて夕食。日本野鳥の會阪神支部の仕事として、四、五月頃、川村多實二教授より御依頼の生態寫眞展覽會

を大阪にて開催の件、各郊外電鐵の手引草ともなるべき、大阪府下の日歸り野鳥觀察便覽の如きものを、榎本先生を主體として編纂し、四月末發行十錢位で發賣の件等を協議す。(守山白雲記)

新入會員芳名

- | | |
|--------------|-------|
| 東京市足立區小臺町六三九 | 宇田川育男 |
| 神戸市神戸區榮町通五丁目 | 今井悦太郎 |
| 三十四番屋敷 | |
| 仙臺市覺性院丁一八 | 岩谷 貞一 |
| 東京市牛込區若松町一〇二 | 津輕 照子 |
| 大阪市大正區大正通六ノ二 | 後藤 康男 |
| 神戸市須磨區千守町二ノ〇 | 森 月城 |
| 大阪府中河内郡小阪町中小 | 光谷 清江 |
| 阪五四四 | |
| 大阪市浪速區元町二ノ二一 | 橘 徳松 |
| 大阪東區中道唐居町一五七 | 一ノ瀬義美 |
| 兵庫縣伊丹町一九四 | 岡田利兵衛 |
| 東京市麻布區筭町一七六 | 何 英吉 |
| 秋田縣北秋田郡山瀬營林署 | 小笠原順治 |
- 移轉町名改正
- | | |
|-------|--------------|
| 榎本佳樹氏 | 大阪市北區都島北通四丁目 |
| 高島精一氏 | 四十九へ |
| | 高知市若松町北通二丁目 |

「野鳥」昭和12年3月号から 当時の山田池の様子が紹介されている。マガモ、コガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、トモエガモ、ヒドリガモなど2千羽に近い数が見られたとのこと。又、茨木駅近くの八丁池や松澤池、釈迦池、茨木ゴルフリンクスについての記載も。大阪府下の日歸り野鳥觀察便覽の如きものを榎本先生を主體として編集し、発行、発売の件を協議したとの記載あり。